20240519　ペンテコステ礼拝　使徒言行録２章14～22節

「立派になったよ、ペトロさん」

今日、私の家族は、妻の実家のある沖縄に行っています。家にいて、こんなにも静寂な時間を過ごせたことは、いつ振りだろうかと思います。まぁ、お互い寂しくなる前に帰省して欲しいとは思いますが、時々は、静かな時間を過ごすのも良いものだというのが、正直な感想です。この５月は、思えば忙しなく、先日のゴールデンウイークでは、私の方の実家に帰省していました。実家の近くには、ビカリアミュージアムという化石の展示および化石の発掘体験のできる施設があります。長男の辰季は、この施設がお気に入りで、ここ２年は帰省の度に発掘体験と言うか、もはや発掘調査と呼べるくらい作業を続けています。施設の名前にもなっているビカリアとは、小さな巻貝のことで、私の実家の近くでは、このビカリアという巻貝の化石が大量に採れます。ビカリアの他にも、岩ガキだったり、カニだったり、ワニだったり、ようは昔の水棲生物の化石が採れる土地なんですね。

ところで、化石と一言で言っても、その形態による分類があります。私たちが一番に思い浮かべるのは、体化石（たいかせき）と言って、骨や貝殻自体が化石となっているものです。アンモナイトの化石とか、恐竜の大腿骨の化石とか、そういうものですね。実は他にも分類があります。生痕化石(せいこんかせき)といって、太古の生き物が残した「生痕」、生きた痕が化石化したものです。例えば、恐竜の足跡の化石とか、虫が這った跡の化石とか、糞の化石とかですね。あと、もう一つ。印象化石(いんしょうかせき)といって、生物の形や輪郭が石に刻まれているものがあります。植物の葉脈が写し取られた化石とか、貝殻の模様が転写された化石とかですね。貝の化石が沢山採れるビカリアミュージアムでは、当然、この印象化石も多く発掘されていまし

た。貝そのものが化石になった体化石に比べると、貝殻の模様でしかない印象化石は、ちょっと物足りない感じもしますが、その生き物が生きていた証しを残しているという点では、体化石も印象化石も貴重であることに変わりはないんだよ、と、印象化石を手にして不満げな辰季に対して、現場のおじちゃんが教えてくれていました。

実物それ自体は見えないんだけども、でも、その印象を留めているものを観察することで、見えない実物について考えてみる、というのは、これ私たちの信仰生活においても、とても大切なことですよね。私たちは、聖霊という見えない存在を考える時に、見えないにも関わらず、聖霊という存在自体に目が行ってしまって、結局「聖霊って見えないし、難しいし、良く分からない」ということになりがちです。どうにか聖霊を可視化しようと、目に見えるものとして捉えようと「炎のような舌」を描き出してみたり、そのイメージとよく似ているバラの花びらを撒いたりする場合もあります。イタリアの教会では、バラの花びらを撒く習慣があるそうです。ただ、ペンテコステという、曲がりなりにもキリスト教三大祭日である今日が、クリスマスやイースターと違って、全然目立たず、盛り上がらないのは、多分、赤ちゃんイエス様とか、羊飼いとか、占星術の学者とか、あるいは、墓石を破って復活したことを象徴する卵とか、多産と生命の象徴であるウサギとか、何より復活されたイエス様御自身とか、目に見え、触れ、容易に捉えられる、そんな分かり易いオブジェクト、対象物が無いからだと個人的には思っています。さっきの化石の話に重ねて言いますと、クリスマスやイースターには、実物である体化石があるんだけど、ペンテコステには見て、触れる実物が何にも無いんですよね。目に見えない聖霊、風の中や、音の中に感じるしかない聖霊は、キリスト教の教会の中であっても、やっぱり捉えにくいものであり、説明の難しいものであると、牧師と言う立場ではありますが、正直に、私はそう思います。

だから、今日は、聖霊そのものを説明すると言うより、聖霊の働いた痕跡、聖霊の残した印象の方に目を向けてみたいと思います。見えず、触れず、風のような振る舞いをする聖霊ですが、その尊く力強い働きは、しっかりとペトロさんという一人の信仰者の中に注ぎ、また刻み込まれています。

振り返ってみましょう。ペトロさんって、最初、どんな人物であったか。ペトロさんは、もともと魚を獲る漁師でした。それは、つまり人前で説教をしたり、演説をしたりということを職業にしていたわけではないということです。しかし、イエス様に、漁師なのに自分が一本釣りされる形で、使徒ペトロとしての生き方を始めることになりました。イエス様の 12 弟子、しかも、その筆頭者としてペトロさんは、ペトロさんなりに頑張ってきました。必要最小限以下の持ち物しか許されず、ほとんど身一つで、イスラエルの町へと派遣され、路傍伝道、訪問伝道に尽力しました。きっと、受け入れてもらえず、つらい思いをしたり、悔しい思いをしたりしたこともあっただろうと想像します。イエス様に言われた通り、自分を受け入れなかった町に対して、足の埃を払ったことは一度ではなかったでしょう。ただ、どんなに頑張ったとしても、ペトロさんの振る舞いには、いつもどこか足りない部分がありました。ペトロさんは、イエス様が御自分の十字架上での最後を宣言した時、「それは、とんでもないことです」と言ってイエス様を諌め、イエス様から「サタン、引き下がれ。あなたは私の邪魔をする者」と言われてしまいます。考えてみてください。大好きなイエス様から、サタン呼ばわりされたら、これはたまったもんじゃありません。また、イエス様の次に誰が偉いのか、という非常に俗っぽいことで他の弟子たちと議論していたという記録も残っています。立身出世の魅力を理解できる私としては、ペトロさんのその想いも分からなくはないですが、でも、やっぱり格好良くはないですよね。そして、ペトロさんの格好良くないところを、最も先鋭に描き出しているのは、やはり「三度の否定」の出来事です。

ペトロさんは、イエス様のことを「神の子です」と言って、弟子たちの中で誰よりも早く正しい信仰告白を行いました。何があってもイエス様に着いて行くことを約束もしました。けれど、いざイエス様が逮捕されるとなった時、ペトロさんは他の弟子たちと同様に逃げ去り、姿を消してしまいます。もっとも、その後のイエス様の様子が気になって、イエス様が連行されるところを付けて行って、ことの顛末を見届けようと勇気を出した点は、一番弟子に相応しい態度だったかも知れません。けれど、その結果は、受難節の日々に何度も取り上げる通り、ペトロさんは怖くなってしまって、イエス様のことを3回も「知らない、関係ない」と言ってしまいます。「呪いの言葉さえつぶやいた」という証言も残っています。他にも、イエス様の真似をしようとして湖で溺れかけた話とか、モーセとエリヤとイエス様のために小屋を建てようと提案した話とか、ペトロさんを紹介する上で、あまり格好良くないお話は多々あるわけですが、それらを総括して浮かび上がってくるのは、やはりペトロさんの、どこか頼りなく、足りない部分が見えてしまう、そんな姿であると言えるでしょう。

しかし、翻って、今日の聖書箇所に出て来るペトロさんですよ。キリスト教の前身であるユダヤ教において、過ぎ越しの祭から50日が経って行われる五旬祭の日。この大きなお祭りであった五旬祭において、「突然、激しい風が吹いてくるような音が天から聞こえ、家中に響いた」と言います。その詳しい内容は、今回は、どうでも良くてですね、とりあえず「この物音に大勢の人が集まって来た」と言います。この「大勢」と言うのが、かなりの大人数だったようで、しかも、世界各地から集まった大人数であったことが、その時に多種多様な国の言葉が話されたという状況から推察できます。そんな大人数の、騒々しい、収拾のつかないような現場で、ペトロさんは声を張り上げ、話し始めるのです。「ユダヤの方々、またエルサレムに住むすべての人たち、知っていただきたいことがあります！」と。本人を目の前にしたら、きっと言えない言葉ですが、私

は、このペトロさんの姿を読み取り、見取り「いやぁ、立派になったよ、ペトロさん」と、そう思うわけです。17 節から 21 節には、ヨエル書からの引用が続いています。一介の漁師に過ぎなかった。決して、漁師と言う職業を貶めるわけではありませんが、その職業適性が全く異なる働きをしていたペトロさんが、イエス様のもとで学び、経験し、失敗し、救われ、導かれ、大群衆を前に、堂々と聖書を引用しつつ、説教を語るのです。クリスマスに御子イエス様がこの世界に与えられたことも奇跡です。イースターにイエス様が死者の中から復活されたのも、間違いなく奇跡です。そして、ペンテコステの今日、一人の不器用で、逃げ足が速く、主に仕えることをまるで理解できていなかったペトロさんが、こんなにも雄弁に、主イエス・キリストを証しする説教をした、ということも、大いなる奇跡として、私たちは受け止めるべきでしょう。

そして、この立派になったペトロさんを支え、励まし、立たせ、語らせた存在こそ、目には見えない聖霊だということです。大勢の人が外国語や異言を語る中で、ペトロさんには主の言葉が与えられたのです。力強く説教をする言葉と力が、聖霊によって与えられたのです。それが、ペンテコステに起こった大きな奇跡の一つだということのです。

このペトロさんと通して示された奇跡は、つまり、聖霊の尊く力強い働きは、過去のものではありません。今日の聖書箇所のお話自体は、化石みたいなものです。過去の出来事です。しかし、聖霊は、今なお、私たちの周りにあって、ペトロさんを力づけたように、私たちのことを力づけてくれています。このペトロさんの説教を聞いて、多くの人が洗礼を受けたことで、ペンテコステのことを「教会の誕生日」と言ったりもします。確かに、誕生日は記念すべき大切な日です。誰かが、何かが誕生するというのは大変なことです。ただ、なんであれ、生まれた後にも大変なことは続いていきます。子育てしかり、会社の経営しかり、幼稚園の運営しかり。その初めに大きな苦しみ、大きな力が必要だったことは間違いないけれど、その後も、私たちには力と支

えが必要です。神様は、今を生きる私達にも豊かな聖霊を注いでくださっています。豊かな聖霊が注がれているからこそ、今日も、こうして私たちは礼拝が出来ています。今日も礼拝を皆さんで捧げることができている、それって決して小さなことではありません。ここに集まった一人ひとりの奉仕があり、祈りがあり、献金があり、信仰があって実現できていることです。礼拝それ自体が奇跡なのかも知れません。そして、この礼拝を捧げる私たちの背後や、頭上や、隣にあって、私たちを励まし、働かれているのが聖霊なのです。

だから、礼拝から1週間を歩み出す私たちこそが、実は聖霊の働きを証しする者である、ということです。実態の掴めない聖霊の、確かな働きの顕れが私たちです。ペンテコステの今日、2000年前にではなく、今まさに働いておられる聖霊の力を、お互いの賛美の声の中に感じつつ、共に祈り、信じて参りましょう。お祈りを致します。

神様。今日も私たちに聖霊を注ぎ、今日もこうして力と導きとをお与えくださり、心から感謝致します。生ける神であるあなたは、主イエス・キリストと共に、この世界を守り、導き、そして、聖霊を降して、私たちに生きる喜びを与えてくださいます。目には見えない聖霊は、確かにここにあって、私たちに祈りの言葉を教え、賛美する力をもたらし、それによって、私たちの信仰を育て、教会の営みを率いてくださいます。この教会が、この教会に集う私たちが、聖霊の働きを証しする一人として、これから始まる1週間、主の栄光のために、隣人の幸せのために仕えることができますように。どうか御守り、お支えください。

このお祈りを、聖霊の導きのままに、御子イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。